

# 仕事人秘録

浜松を去るとき、鈴木康友市長からも温かい言葉をもたらした。

「中小企業や起業の支援は補助金だけではだめで、限界を感じていました。小出さんが浜松で一石を投じて下さいました。それだけに本当に残念です。短い間でも小出さんはちゃんと成果を出して下さいました」。鈴木市長から過分な言葉を頂いたのを昨日のこのように覚えていきます。

浜松時代はとても短かったのですが、この世界で骨をうずめる自信と確信を持たたのは間違いありません。そこで、もう一つ浜松での取り組みを紹介しましょう。

その男性はアポイントなしに現れました。「木製の

## 行列のできる経営相談所 ⑩

富士市産業支援センター長  
小出 宗昭氏



豊岡クラフトの工房で社長の山崎肇さん（当時、右から2人目）らと

## 浜松で得た自信と確信

思い、こう提案しました。ヨナリーを手広く扱うようになりまし。当時の社長だった山崎肇会長には「銀座の和光に置いてもらえるようにしましよ」とエールを送りました。競争の存在など下調べもた。もの作り魂に火がつき、知識も無かったのですが会社に活力が生まれたので「やってみましよう。セー。同社はその後も確実に成果をあげています。仮説でもらっている木製文具でと検証を繰り返すことの大切さを体験できました。電話を」と背中を押しまし。富士市産業支援センターの開所式は2008年8月4日。その前に富士市から業務委託を受ける会社を設立する必要がある。さて社名をどうするか。知り合いのコピーライターである杉本剛敏さん（現副センター長）に20ぐらい候補をつくってもらい、「イドム」に決めました。「挑む」という意味が込められており、長女からは「チャレンジする社名にピッタリ」と言われまし。

文具や家具をつくっている会社は手ごわくなるかな」という思いが頭をよぎりました。深刻な表情で話されましが、販売チャネルを聞くこと。息子さんを後継ぎとして迎え入れたのですが、次手として扱ってまらう感じでした。この通販誌の効果は絶大で、高級文具店などから引き合いが来るようになりまし。豊岡クラフト（浜松）という会社の話です。その後は木製の書見台、万年筆入れなど高級ステーション

「丸善です。あなたの商品は超一流じゃないですか」と言つと、「そ市」という会社の話です。その後は木製の書見台、万年筆入れなど高級ステーション